お言葉どおり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24753

「お言葉どおり」

院長　佐々木　哲夫

ルカによる福音書　一章二六～三八節

26六か月目に天使ガブリエルは、ナザレというガラリヤの町に神から遣わされた。27ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。28天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることはない。」34マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」35天使は答えた。「精霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子とよばれる。36あなたの親類のエリザベ

トも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。37神にできないことは何一つない。」38マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」そこで、天使は去って行った。

「六か月目」という書き出しで、本日の新約聖書の箇所は始まっています。「六か月目」の出来事とは、天使ガブリエルが祭司ザカリアのもとに現れて妻エリサベトの受胎を告知してから六か月後に、今度は、マリアのもとに現れて彼女の受胎を告知したという出来事です。この箇所には、もう一つ「六ヶ月」の出来事が記されています。三六節です。「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」という記述です。六ヶ月目の頃とは、胎動が始まる時期です。のちに、マリアの挨拶を聞いたエリサベトの胎内の子が喜んで踊ったと描写されているとおり、エリサベトの受胎が本当だと自覚された時期です。旧約聖書の人物ダニエルに二度あらわれた天使ガブリエルが、この場面では、エリサベトとマリアに現れて受胎告知をしています。本日は、六ヶ月目の出来事に注目しながら、イエス・キリストの誕生について学びたいと思います。

☆

さて、最初の出来事、天使ガブリエルがマリアに現れた出来事に注目したいと思います。二八節からです。「天使は、彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」というのです。「主があなたと共におられる」という挨拶は、旧約聖書にしばしば出てくる表現です。例えば、族長のイサクやヤコブに主が現れて「あなたと共にいる」と語りかけていますし、出エジプトの時代に、モーセやヨシュアにも同じ言葉がかけられています。ヨシュアの箇所では「あなたと共にいる」が三回も語られています。有名な箇所です。「主はヌンの子ヨシュアに命じて言われた。強く、また雄々しくあれ。あなたこそ、わたしが彼らに誓った土地にイスラエルの人々を導き入れる者である。わたしはいつもあなたと共にいる。」「一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。」「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」確かに、「共にいる」が三回語られています。王や預言者も、また詩編の記者もそうでした。例えば、詩編二三篇の記者は「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共に

いてくださる」と詠んでいるとおりです。

旧約聖書のそうそうたる人物たちに告げられた言葉「主があなたと共におられる」が、この時、マリアにも告げられたのです。マリアは戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだのは当然でした。そこでガブリエルは説明します。三〇節です。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」というのです。「主があなたと共におられる」の具体的な意味が分かった時、マリアは即座にそれを否定します。三四節です。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」マリアの反論は、人間の経験に基づく理性的判断でした。そこで、天使ガブリエルは、第二の六ヶ月目の出来事を告げることになります。三六節です。「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。」神の言葉が真実であることを担保するしるしとして、マリアの親戚のエリサベトが子供を確かに宿しているという事実を示したのです。しるしを突きつけられたマリアは、納得して言います。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」告げられた主の言葉をマリアが信じ受け入れたので、天使ガブリエルは去って行きました。

☆☆

さて、マリアがしるしを求めた出来事は、マリアが不信仰であったことを示すものではありません。しるしを求めることは、聖書の登場人物にしばしば見られる普通のことでした。例えば、信仰の父と呼ばれたアブラハムにおいてもそうでした。アブラハムがまだアブラムと呼ばれていた時、神から祝福の言葉が与えられたのです。創世記十五章です。「見よ、主の言葉があった。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」アブラムには子供がいませんでしたが、「あなたの子孫は星の数ほどになる」という神の約束を信じたのです。しかし、もう一つの約束、土地を与えるとの言葉が与えられた時、アブラムは尋ねました。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」しるしを求めたのです。創世記十五章には、契約のしるしとして、献げ物を真二つに切って向かい合わせにする出来事が記されています。この出来事が由来となって、ヘブル語では、「契約を結ぶ」ことを「契約を切る」と表現します。言葉の真実性を保証するしるしとしての契約です。いずれにせよ、マリアの態度は、ごく普通の反応だったのです。

☆☆☆

ところで、「主があなたと共におられる」しるしとしてマリアに与えられたものは、親戚エリザベトの受胎でした。この時、マリアは気がつかなかったのですが、マリア自身の受胎もまた「しるし」としての出来事だったのです。マリアの受胎をマタイ福音書は「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」と記しています。この言葉はイザヤ書からの引用ですが、イザヤ書はメシア預言として「わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ」と語っています。イエス・キリストの誕生がしるしであることを明示しています。

では、イエス・キリストの誕生は、何を指し示すしるしだったのでしょうか。それは、ヨハネ福音書三章十六節が証しています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」イエス・キリストの誕生は、神の愛のしるし、信じるためのしるしでした。この人を見よ。まさに、イエス・キリストの生涯、すなわち、十字架と復活の生涯は、人類の歴史に与えられた神の愛の具体的なしるしでした。イエス・キリストの誕生は、私たちが「お言葉どおり、この身に成りますように」と告白する神の愛のしるしなのです。